
野花の管理－無鄰菴庭園の価値性を尊重して－

Fostering Wild Flowers – Esteem for the Value of Murin-an Garden

阪上富男・加藤友規・出口健太・半田沙奈絵

Tomio Sakaue, Tomoki Kato, Kenta Deguti, Sanae Handa

植彌加藤造園株式会社

UEYAKATO LANDSCAPE Co., LTD

Key Words : 1.無鄰菴 2.文化財庭園 3.育成管理

1.Murin-an 2. Cultural Property Garden 3. Garden Fostering

はじめに

名勝無鄰菴庭園（以下、無鄰菴¹⁾）における野花に配慮した芝生管理は、プロポーザル入札制度が開始された2007（平成19）年から実施しているが、自生えのネジバナなどの数種を芝刈りの際に残す程度だった。名勝指定時の説明文にある「明るい近代的庭景を与える」芝生の価値性を高めるため、2015（平成26）年から野花の管理とのための調査研究を本格的に開始した。

調査を行った3年間（2015～2017）は、管理と平行しながらの調査研究と検証を重ねていたが、その時々々の検証に頼った管理になりがちであった。しかし野花を生かした庭園の本質的価値を高めていくためには、体系立てた野花の検証が必要であると考え、以下の6項目に着目した。①先行研究、②史資料（山縣のことは・自然観、評価）、③歴史的変遷、④指定の説明文、⑤来園者のことは、⑥庭園の現況などである。

この活動を通して、これまでの「維持管理」とは違い、庭園の変化に対応しながら管理方針を改め、庭園に寄り添い育むように管理する「育成管理」が大切であるとの実感を得た。本稿では野花を生かした本質的価値を現わしていく研究について報告する。

1. 「野花の管理」の発端

「野花の管理」の発端は（尼崎博正「庭園の美－その保護のために」²⁾『月刊文化財511号』2006）の一文で、「歴史的な庭園の美とは何かを考えると、時代の感性を読み取ることの大切さに思いを馳せたいものである。」であった。そして古写真³⁾（写真－1）の庭の雰囲気と現況

（2006 年時）の違いは手入れにあると述べられていた。

名勝指定時の説明文にある評価要素は庭の価値性と見ることができる。そのため「明るい近代的庭景を与える」芝生の管理は、庭園の価値性を高める重要な要素となった。樹木に比べ、短期間で変化が表出する芝生の魅力を増すために、芝生の中に自生えする野花に着目した。

ネジバナなど見栄する野花を数種だけ残した手入れを考えたが、では他のものはすべて刈ってしまっているのか、とも考えた。加えて、自生えの野花は目視だけでも数十種認められ、それぞれの生長の周期を把握しないままに管理を継続すれば、どういう芝生の状態になるのか不安に駆られた。そのため、2015年から本格的な「野花の管理」と調査に着手した。

2. 「野花の管理」の経緯

京都市の『名勝 無鄰菴庭園 保存管理指針（暫定版）』（2015）には、「本質的価値の再検討」の項目で「本質的価値に係る事項の抽出」がなされ、それに基づいて保存管理方針を打ち出している。そこには山縣のことはを抜粋して庭園の価値を見出だしたり、来園者のことはをも庭園の方針に取り込むなどの記述が見えた。また、庭園が別荘時代と公共となった現在では利用目的や周囲の環境などが変化している点への配慮にも言及されていた。

そこで我々庭師は、保存管理指針をもとに、文化財庭園は「育成管理」をするという理念のもと、現場で探究することが必要だと考えた。弊社では、これまでの技術や経験に加え、庭園に関わる学術的な知識を深め、その



写真-1 『京華林泉帖』に掲載された無鄰菴の古写真



写真-2 写真帖『無隣菴』の古写真

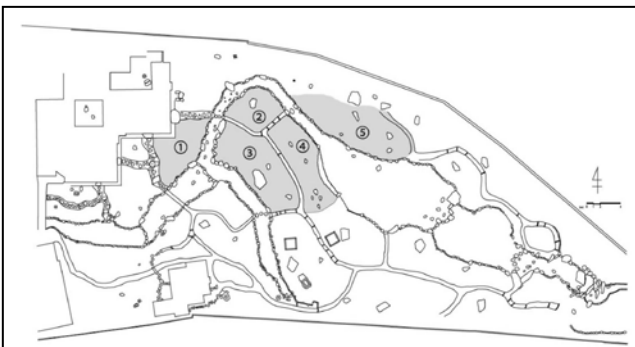


図-1 芝生区分図

上で庭園管理に臨む体制作りに取り組んできた。

これらを踏まえ、無鄰菴の「育成管理」では、史資料にみる山縣のこば、古写真、山縣の自然観⁴⁾などから検証し、野花の管理の方向性を導き出すこととした。

古写真など画像資料を積極的に収集したが、そのなかに興味深い近い2枚の写真があり、それぞれが異なる無鄰菴の姿を映していた。『京華林泉帖』（写真-1）と写真帳『無鄰菴』⁵⁾（写真-2）の写真である。前者はまさし

く芝生が伸び、野花がある景色であり、後者は芝生と野花がすっきりと刈られ、整えられた景色であった。そのため一度立てた野花を生かした芝生の管理を継続することへの不安が生じた。

しかし、いずれもが、かつての無鄰菴の姿であることには違いは無く、一年を通した管理の中での、ある時期を映したものであると考えるならば、双方とも管理をした結果の姿ということになる。ならば野花の管理を継続しなければ、異なる2枚の写真を理解することができないとの考えに至った。そこで収集史資料を経年や方位など系統的に整理し、考察や分析を重ねかつての庭園の情報を得るなども行い、育成を進めた。それがやがてこの2枚の写真の違いを解き明かす、導きともなった。

2枚の古写真は、まず季節に大きく違いがあり、折々の植生ならではの景色であった。後者の整ったシバの状態を保つには、現在の無鄰菴で行っているような頻度の多い芝刈りが必要となり、前者に見るような野花が生い茂る景色もあったことから、芝刈りの頻度が現在より少なかった可能性を実務にて推察した。

別荘時代の無鄰菴は、公共空間ではなく、来荘者も少ないため、現在よりも大らかな感覚でシバの管理がされていたとの思いに至った。

3. 「野花の管理」と調査研究

はじめに、野花を管理する芝生を、5 区にエリアを分割して、場所ごとの環境と野花の生育状態、来園者からの見え方の違いを調べた。（図-1）

調べてみると、実に多くの種類があり、山縣の時代には存在しなかったであろう外来種も確認できた。そのため、それらを保護するかを判断する材料として、それぞれの植物に対して詳細な調査を行った。1年目には35種類、2年目には45種類、3年目には54種類を同定し、「植物別情報まとめ」⁶⁾を作成した。（図-2-1, 2-2）初年度の調査開始からまもなく、野花の開花最盛期を迎えた。調査のためにすべての野花を除草せず、それらを保護するために「芝生立入り禁止期間」（4月15日～5月15日）を設定した。野花が咲き揃った景色は思いのほか美しく、翌年度の再生を目指し、種を落とすため、枯らしたままの状態を一週間ほど刈らずに残した。枯れた時期には来園者から「手入れできていない」と声が聞かれた。

1. タネツケバナ (種漬花)

Cardamine scutata アブラナ科タネツケバナ属

分布：全国

在来・外来：在来

生育環境：田畑など湿った土地

出芽期：9月～4月

花期：2月下旬～4月

草丈：足首～膝

生活史：一年生 (冬生)

繁殖器官：種子 (自動、付着)

繁殖力：普通



2015年4月17日 流れの中

見た目の特徴：ロゼット状の葉は奇数羽状複葉。白色の4弁花。花弁は長さ3～4mm、茎下部から数本の茎を直立させる。枝先に総状花序をなす。果実は約2cmで、線形で斜めにつく。開花期には茎基部の葉は枯れ、茎葉のみとなる事が多い。種子は1果実中に十数個。

花の特徴：色は白。花は小さいが、まとまって咲くため存在感がある。

花言葉：勝利、情熱、不屈の精神、父の失策

文化的背景：名前はイネの苗代の種籾を水につける頃に花が咲くことに由来し、「タネツケバナ」と名付けられたという。春の野花の代表として早春の田んぼで見られ、田面を思わせる花。

景色と手入れ：無繻菫の野花の中で、年明け後の最も早い2月下旬に流れや洲浜で開花し、春を告げる。本種の同定は難しいと言われる。自信は無いが無繻菫には2種あり、一つの種は流れの石に乗った土の上、護岸際など水辺に生える。一般的には浅い流れに群生するが、無繻菫では山の中小川を現したような速い流れの石の上にいる。草丈も花数も観賞するのに丁度良いボリュームで、上品に咲く。タネができてこぼれ落ちて、流れに乗ってどこかへ行ってしまふ。なので種が落ちることは気にしない。じっくりたつぷり観賞して、枯れが目立ったら抜き取る。来年度の個体数は今年以上でも以下でもなく、現状キープで居て欲しい。流れの中に存在するタネツケバナだからゆると構えているが、もうひとつの種、これが芝生に生えた時の態度は別だ。草丈は高さ5cmほどと小さく、細いタネの脚を上げ、芝地2にビッシリと生えていた。これに初めて気がついた時はゾツとした。細く小さい個体を1つ1つ除草しても手遅れであり、草丈の関係で刈払機も効かない。流れの個体は個体数を制限しながらゆると眺め、芝地の個体は見つけ次第除去する。野花の観賞と芝生の良好な生育、管理に掛る手間、をのバランスに注意を払いたい。

2. スズメノヤリ (雀の槍)

Luzula capitata イグサ科スズメノヤリ属

分布：全国

在来・外来：在来

生育環境：芝地、畦畔、道端、土手など

日当たりの良い乾いた草地

出芽：11月～4月

花期：3月～5月

草丈：足首～腰

生活史：多年生 (冬生)

繁殖器官：種子 (重力、アリ)、根茎

繁殖力：やや強い



2015年4月7日 芝地3

見た目の特徴：茎は短くて地下にある。第1,2葉は先の尖る線形。第3葉から広線形。葉腋から分岐の葉を出した場合葉は互生し、縁に長い白い毛がある。葉の先は硬く、褐色を帯びる。花序は雄性交熟。花被片は6枚で赤褐色の小さな花が密集した球形の約1cmの花序を1つつける。花序は雄性交熟。花被片は6枚で赤褐色から黒褐色、披針形で先が尖る。柱頭は3本、雄ずいは6本で葯は黄色。蒴果は花被片と同長で、三角状倒卵形。中に種子を3個入れる。基部にエライオソームをつける。

花の特徴：色は赤褐色から黒褐色、一部黄と白。イチゴのような色と形で春らしく、存在感がある。

花言葉：邪魔しない

文化的背景：多数の花が集まっている頭花が、江戸時代の大行列の毛槍と似ていることに由来して名付けられたという。「何かに似ているけれども、小さく、役に立たない」ことを表すために、また、小さなスズメが使った道長や食べ物に見立てて「スズメノ・・・」と付けられるそう。

景色と手入れ：スズメノヤリは可愛い。赤い花がイチゴのようで、葉には毛が生えてフワフワで、園路を歩きながら観賞でき、愛嬌がある。スズメノヤリを見た来園者より「懐かしい。小さいころ裏庭でよく見かけた」と親しみのこもった声を聞いた。無繻菫の春の芝地にスズメノヤリが居てくれて良かった。一年目は芝地3の天端にまとまって生えていたため、景色が引き締まっていた。二年目は全体に散らばり(それはそれで良いが)メリハリが無くなった。三年目は冬の除草をしすぎて個体数が激減してしまった。繁殖力が強いので、気を抜くと増えすぎる。が、除草もしやすいのでついやりしすぎてしまふ。加減が難しい。存在させる場所を決め、それ以外を除草するという手もある。アグシオンに対してのアグシオンが正直なので、この悪戦苦闘が面白い。管理がスムーズにいくよう、現在は見つけ次第除草している。

図-1-1 1. タネツケバナ (種漬花) 「植物別情報まとめ」より抜粋

図-2-2 2. スズメノヤリ (雀の槍) 「植物別情報まとめ」より抜粋

すべての野花を育成したが、ノミノフスマは芝生に悪影響を与えることがわかった。当初は狭い範囲での自生であったため成長を観察したが、「芝生立入り禁止期間」以降に除草すると、芝生が衰弱していることが判明した。このため、ノミノフスマは除去する方針を決めた。

来園者の声や、芝生の状態、「植物別情報まとめ」などを踏まえて「野花の管理」をする方針を決める手掛かりとし、次の3つの概念区分をした。観賞する「野花」、除去する「雑草」この二つを包括する「野草」と区分し、管理を進めた。

野花の中には、外来種であっても観賞の対象となりうるもの、雑草についても手入れ次第で観賞できるものがあることがわかり、新たな概念区分が生じてきた。

次に管理方法をまとめた。観賞して種を落とすものを「○」、観賞するが個体数は制限するものを「△」、見つけ次第除草するものを「×」で示し、除草の方法も、手引除草で根っこから引く、刈払い機で地表面だけ飛ばすなど、野草ごとに適した方法を選択した。(表一)

次に、野草ごとの一年間の育成サイクルについての表を作成し、種が落ちる前の除草時期を予想し、いつ、どんな野草を観賞することができるかなど、来園者への発信が可能となった。(表二) 野花の管理の3年間の調査における記録の蓄積は、やがて冊子『野花の調査』を作成することにつながり、来園者に対して季節ごとの野花の様子などを視覚的に伝える素材にもなった。

管理をすすめるうちに、越冬する二年草が11月頃発芽することがわかり、冬の期間の除草を行った。最盛期4～5月に向けて「野花」が成長する前に「雑草」を取り除く試みだ。その結果、前年に比べて野花の最盛期の「雑草」の個体数が減少し、野花が活かされ、調和のとれた状態で迎えることができた。

生えればすべて除去の対象としてきた「雑草」の中にも、来園者の目に触れた際に「懐かしい。子供のころ、裏の空き地で見た」などの声が寄せられたものもあった。郷愁の感情が庭園の風情を増すことに気付かされ、全てを除去するのではなく、野花のように管理するものを摘出した。野草全体を、適した時期に適した方法で管理することによって、野花として捉えることができると判明した。

4. 芝生管理の変遷から見た野花の管理

芝生の管理の変遷を見るための詳しい手掛かりが少なく、プロポーザル入札制度開始前の資料にわずかに言及を見ることができる⁷⁾。大藪論文⁸⁾には、2003(平成15)年頃は芝刈り年9回、施肥年3回、エアレーション年3回の計画が記載されている。

プロポーザル入札制度(2007～2015年)の期間は、各受託業者からの提案が管理に採用されたが、京都市からの仕様書案には芝刈り年7回・刈高3cm以下、施肥年3回、エアレーション年3回と提案があった。

それをふまえても植栽では野花を生かした庭園の育成管理を目指し、芝生の管理は芝刈り年6回、施肥年1回、エアレーション年1回行った。

2015(平成27)年の芝生の管理は古写真(写真一)をふまえ、野花の管理を優先し、シバの刈高を高くした。手入れができていないような見栄えとならないように、来園者の目に近い園路際は短く(年10回)、よく目立つ芝生の丘の天端は揃え、庭の奥に向かい刈高を高くするなど(3～15cm)工夫をしたが、それでも来園者からは「手入れできてない」と指摘があった。古写真の景色に本質的価値があると考え、芝生管理を行ってきたが、来園者それぞれに様々な受け取りがあることがわかった。

そうした様々な感想を受け止めて、2016年は刈高を低くしつつ(3～10cm・芝刈り年8回)、野花は風にそよぐ穂のあるものを観賞するために部分的に残した。

だが前年も含めて刈高を高く管理していたために、サッチ(枯葉)が溜まり、コケが増加し株元の日照条件が悪くなり、芝生の衰弱が見られた。刈高を高く管理すると、芝生が健全でなくなることが分り、同年10月からは芝生が健全であることを優先した。芝生全面に対して刈高3cmとし、サッチとコケは除去した。

野花については、草丈の低いスミレなどは刈られずに残り、芝生が短くなったため、日照条件が向上し、翌年2月には個体数が増加した。繁殖力の強いチガヤなどは穂が出る前に刈り取り、種が出来ないようにすることで個体数が減少した。こうした管理を後押ししたのが「半自然草原」⁹⁾における研究であり、野花の管理においては新たな手法を模索する上で参考となった。

さきにも触れた、同時期の古写真2枚にみる庭園の景色の違いは、季節によるものが大きいですが、当時山縣は芝

表-1「手入れ方法に関する一覧表」(部分)

	植物名／生活史 学名	手入方法	手引除草の 困難さ	冬の除草	除去方法	繁殖力	花期	除草適期	存在箇所	残し方・残す箇所	その他
1	タネツケバナ／一年生(冬生) <i>Cardamine scutata</i>	△	○	—	手引き	△	2下～4月	1月～	②③流れ	流れの個体は残す	流れの個体は觀賞し、定地の個体は見つけ次第除草する。
2	スズメノヤリ／多年生(冬生) <i>Luzula capitata</i>	×	△	施す	手引き・刈払	○	3～5月	2月～	①②③④⑤	—	2015年は觀賞し種を落としていたが、2018年からは見つけ次第除草している。
3	スズメノカタビラ／一年生(冬生) <i>Poa annua</i>	×	△	—	手引き・刈払	△	3～5月	2月～	①②③④⑤	—	イトコスガサに似ている。
4	スギナ・ツクシ／多年生(夏生) <i>Equisetum arvense</i>	×・△	×	—	刈取り・刈払	○	3月下旬	4月～	①②③④⑤ 護岸際	ツクシのみ残す	根深い。
5	ヒメスミレ／多年草 <i>Viola inconspicua</i>	○	×	—	刈取り・手引き	△	3下～4月	—	①②③④⑤	場所を決めて 適度に野生させる	根深い。スミレに似ているがスミレより開花が早い。
6	スズ／多年草 <i>Carex sp.</i>	×	×	施す	刈取り・刈払	◎	3下～5月	2月～	①②③④⑤ 護岸際	—	根深い。花穂を摘み、繁殖を抑える。可能な限り全て除草する。
7	オランダミナグサ／一年生(冬生) <i>Cerastium glomeratum</i>	×	○	施す	手引き・刈払	◎	4月	2月～	①②③④⑤	—	手がべたつく、可能な限り全て除草する。
8	タイヌツグリ／一年生(冬生) <i>Veronica arvensis</i>	×	○	施す	手引き・刈払	◎	4～5月上旬	2月～	①②③④⑤	—	ミントみたいな葉。可能な限り全て除草する。
9	パンパノ／多年生(夏生) <i>Zoysia japonica</i>	○	×	—	刈払・エッジ切り	△	4～6月	—	①②③④⑤ (シバに合わせる)	—	平成29年度は年7回芝刈り。
10	マツバウラボシ／一年生(冬生) <i>Nuttallanthus canadensis</i>	△	○	—	手引き・刈払	○	4中～5月上旬	3月～	①②③④⑤	場所を決めて 適度に野生させる	根が深く除草容易。
11	カンサイタンポポ／多年生 <i>Taraxacum japonicum</i>	○	×	—	—	×	4～5月	—	④	④	芝刈りの際目印を立てて、刈払わないようにする。
12	スミレ／多年生(冬生) <i>Stellaria uliginosa</i>	△	△	施す	手引き	○	4～5月	3月～	①	場所を決めて 適度に野生させる	芝生をハグさせる。
13	カラスビシャク／多年生(夏生) <i>Pinellia terata</i>	○	○	—	—	△	4～5月	— (自然消滅)	③の ツツジの中	③の ツツジの中	個体数が増えない。秋にも出葉し栄養を貯める。
14	スミレ／多年草 <i>Viola mandshurica</i>	○	×	—	刈取り・手引き	△	4下～5月	—	①②③④⑤	場所を決めて 適度に野生させる	ツマグロヒヨウモンが葉を食べる。根深い。
15	ヒメコサカサ／多年草 <i>Agrostis valvata</i>	△	○	—	刈払・手引き	○	4下～5月	3月～	②③④⑤	場所を決めて適度に残す	近畿レッドデータブックでは2015年に絶滅危惧種C。
16	ニガナ／多年生 <i>Isoeridium dentatum</i>	△	×	施す	刈取り・刈払・手引き	○	4下～5月	花期以外の常時	①②③④⑤ 護岸際	場所を決めて 適度に残す	根深い。葉が存在している時期が長い。
17	ツメクサ／一年生(冬生) <i>Sagina japonica</i>	×	△	—	手引き	△	4下～5月	見つけ次第	①⑤	—	苔地では繁殖力が強い。芝生では薄着いている。大きくなると除草しにくい。
18	ハルジオン／多年草(冬生) <i>Erigeron philadelphicus</i>	△	△	—	手引き	△	4下～5月	増えすぎる前	③のクサボケ の中	生えた場所	花のみ觀賞。個体数は増やさない。
19	オニタビラコ／一年生(冬生) <i>Youngia japonica</i>	○	△	—	手引き・刈払	×	4下～6月上旬	— (自然消滅)	②⑤	生えた場所	毎年ほぼ同じ個所に生育。
20	コナシビ／多年草(冬生) <i>Lysimachia japonica</i>	△	△	—	手引き・刈払	△	4下～7月	花後 増えすぎる前	①②③④⑤ 流れ	程よい量で	2016年には個体数が多かった。

表-2 「出芽期・開花期・種付け時期に関する一覧表」(部分)

		出芽・生長している			弱 開花している			赤 存在している			少 枯れている			つくし スギナの胎子葉(つくし)が出ている														
植物名 / 生活史 学名		4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
		上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
1	タネツケバナ / 一年生(冬生) <i>Cardamine scutata</i>																											
2	スズメノヤリ / 多年生(冬生) <i>Luzula capitata</i>				種																							
3	スズメノカタビラ / 一年生(冬生) <i>Poa annua</i>					種																						
4	スギナ / ツクシ / 多年生(夏生) <i>Equisetum arvense</i>																											
5	ヒメスミレ / 多年草 <i>Viola inconspicua</i>			種		少																						
6	スゲ / 多年草 <i>Carox sp.</i>			種																								
7	オランダミミナグサ / 一年生(冬生) <i>Cerastium glomeratum</i>				種																							
8	タチイスノフグリ / 一年生(冬生) <i>Veronica arvensis</i>					種																						
9	ノシバ / 多年生(夏生) <i>Zoysia japonica</i>					種																						
10	マツバウンラン / 一年生(冬生) <i>Nuttallanthus canadensis</i>					種																						
11	カンサイタンポポ / 多年生 <i>Taraxacum japonicum</i>			種																								
12	ノミノフスマ / 一年生(冬生) <i>Stellaria uliginosa</i>				種																							
13	カラスビシャク / 多年生(夏生) <i>Pinellia ternata</i>					種																		弱				
14	スミレ / 多年草 <i>Viola mandshurica</i>					種					少									少								
15	ヒメコヌカグサ / 多年草 <i>Agrostis valvata</i>					種																						
16	ニガナ / 多年生 <i>Ixoridium dentatum</i>					種																						
17	ツメクサ / 一年生(冬生) <i>Sagina japonica</i>					種		弱																				
18	ハルジオン / 多年草(冬生) <i>Erigeron philadelphicus</i>						種																					
19	オニタビラコ / 一年生(冬生) <i>Youngia japonica</i>			種																								
20	コナスビ / 多年草(冬生) <i>Lysimachia japonica</i>					種					弱	種															少	

に費用が多くかかることや、鬼芝を植えて刈らせていたという言及がある¹⁰⁾。これを踏まえ、無鄰菴で行ってきた芝生の管理から推察すると、当時の無鄰菴は芝の刈高を短くし、回数は少なく抑えていたと考えられる。

そこで2017（平成28）年からの「野花の管理」では、芝生の健全な育成を優先し、野花を生かした芝生の空間づくりの育成管理を計画した。野花は春の観賞を優先し、それ以降は芝生の育成を優先した（刈高3cm、芝刈年7～8回）。さらに、芝生の価値性を高めるために行う野花を芝生のどこに残し咲かせるのかという検討は、庭園の意匠とも大きくかわるため、管理に携わる庭師の技量に任せられるところもあり、独善的にならず、庭全体の調和を考えた判断が必要になってくる。

おわりに

無鄰菴の価値性を高める育成管理を目指すために、植彌では受託に際し、まずは庭園の管理方針を打ち出すために必要となる本質的価値を明らかにした。そこには、先行研究にて山縣の作庭構想に着目し、それを尊重して歴史的背景も踏まえた調査研究を行うことの大切さを、日々の業務から実感している。

これらの事例として東山や景石¹¹⁾など、周辺環境に合わせながら景を復すよう試みてきたが、当時の景に復す事は叶わないことがわかった。現在実施されている東山など、京都三山林相改善事業¹²⁾においても、明治時代のアカマツ林に戻る可能性は少ない。

そこには、単に表層の復元的修景を行うのではなく、作庭時との違いを気候や周辺環境、庭園の活用目的、人の五感なども含め考慮する必要があると考えた。

本取り組みを通じ「野花の管理」を再考察することによって、庭園の本質的価値を高めていくためには、以下の6項目、①先行研究、②史資料（山縣のことば・自然観、評価）、③歴史的変遷、④指定の説明文、⑤来園者のことば、⑥庭園の現況、などからの体系立てた検証が必要であることが分かった。

「野花の管理」をすすめるなかで、山縣のいた当時の景に戻すなら写真と同じものを植える、との意見もあったが、資史料から読み取った山縣の「名も知らぬ」自生えの野花をよしとした自然観を尊重し、明治から令和へ遷移した現在の自生えの野花の景色を育成管理していく

ことによって、無鄰菴の価値性を高めていくことが出来ると考えている。

参考文献・注釈

- 1) 「むりんあん」の表記に関して、文化財名称としては官報に基づき〔無鄰菴庭園〕とし京都市の施設名称としては京都市無鄰菴等条例に基づき〔無鄰菴〕とする。
- 2) 管理については「芝生を整えることばかり目がいつて、草花もろとも芝を刈ってしまうというような管理をしていないだろうか。」、景色については「ネジバナなどの草花の群れが新緑の野芝の中に一斉にスッと立ち上がっている情景はじつに感動的である。」と言及している。
- 3) 湯本文彦(1909)『京華林泉帖』京都府庁に掲載された写真
- 4) 庭園内にある1901年に建立された山縣自撰の石碑「御賜雅松乃記」の一文「苔乃青みたる中に名も知らぬ草の花の咲出たるもめつらし」から、自生えの野花を大切にすることを山縣の自然観とした。
- 5) 山縣有朋記念館所蔵の写真帖『無隣菴』の古写真。明治40年前後に撮影されたと推測する。
- 6) 浅井元朗(2015)『植調雑草大鑑』全国農村教育会などの書籍を参考に植物の情報を収集した。
- 7) 京都市文化市民局(2015)「名勝無鄰菴庭園 保存管理指針（暫定版）」には、京都市の所管となった1931年以降長く不明な点が多いと記載がある。
- 8) 大藪崇司(2003)「無鄰菴における近年庭園管理」（『庭園学会X 文化財庭園の保存管理技術』P.116）
- 9) 中濱直之ほか(2016)「半自然草地性絶滅危惧植物の保全に好適は草刈り時期を解明—開花結実期の草刈りが繁殖と遺伝的多様性を低下させる—」『Agriculture, Ecosystems and Environment』（電子版）Elsevier
- 10) 黒田譲(1907)『續江湖快心録』京都文具教育商報社：山田聖華書房11「鬼芝を栽てそれで時々刈せる、費用はなかゝゝ多くかゝるが此方がよいようじゃ」との記載がある。
- 11) 阪上富男・加藤友規ほか「名勝無鄰菴庭園における本質的価値の検証にもとづく植栽の育成管理」（『ランドスケープ研究VOL.82』p.44-49）
- 12) 特定の樹種が繁茂するなど不健全な状態に陥った森林を、歴史的背景をふまえ、間伐や植栽によって整備する事業。